

小学校・中学校における心の居場所に関する研究*

宮下 敏 恵**・石川 もよ子***

(平成16年10月29日受付；平成16年12月8日受理)

要 旨

学校場面において、心の居場所づくりの必要性が最近叫ばれている。しかし、小学校・中学校場面において、どのような居場所があり、その居場所はどのような条件が必要とされるかなどの研究はあまりみられない。

本研究の目的は、小学校・中学校における居場所と居場所の条件について調べることであった。小学校においては、教室、クラブ活動、図書室など8場面、中学校においては、教室、トイレ、職員室など8場面それぞれにおいて、居場所の条件を調べた。

大学生及び大学院生185名（男性74名、女性111名）に調査を行った。小学校・中学校それぞれにおいて、場面ごとに因子分析を行った。その結果、2因子から4因子が見られた。小学校においては、自分が認められることが居場所の条件として重要であり、中学校においては、気楽に過ごせるということが居場所として重要であるという結果が見られた。

KEY WORDS

ibasyo 居場所 elementary school 小学校 junior high school 中学校
school space 学校空間

目 的

いじめや不登校などの学校不適応問題が語られる際、心の居場所づくりの必要性が叫ばれることが多くなっている。文部省(現：文部科学省)の学校不適応対策調査会議最終報告書(1992)によれば、「学校は、児童・生徒にとって自己の存在感を実感でき精神的に安心していることのできる『心の居場所』としての役割を果たすことが求められる」と述べられている。また、大寺・小沢・豊田・宮崎・芳賀(2000)は、「学校は、学習の場であるだけでなく、友達との交流の場であったり、時には一人で過ごすこともできる場など様々必要であり、子供たちにとって安心安全を保証するホームグラウンドでなければならない」と述べている。このように、心の居場所を感じられるような学校づくりが求められるようになってきている。文部科学省の調査によれば、平成13年度をピークに不登校の児童・生徒の数やいじめの数は若干減少しているも

* 本研究は平成16年度科学研究費補助金(若手研究B, 15730311, 研究代表者・宮下敏恵)によって行われた。

** 心理臨床講座

*** 大阪府交野市立旭小学校

の、依然として問題は山積しており、複雑化しているのではないだろうか。沖田(1997)によれば、「現在問題になっているのは自分の『居場所』を見つけ、自分の意志で生き方を決定した『学校に行かない不登校』の子どもたちよりも、自分の『居場所』を見つけていない『学校に行けない』不登校の子どもたちの方である。この『学校に行けない』不登校の子どもたちのために、子どもが求める『居場所』の選択肢を増やすことはできないのだろうか」と述べており、心の居場所の重要性はますます高まっているといえる。いじめや不登校などの学校不適応などの問題は別の見方をすると、「自分を認めてほしいという、まわりのおとなに対する子どもの切実なる『心の叫び』(中野,1998)」であるともいえ、居場所がない不安を抱えているとも考えられる。

このように、教育現場において「心の居場所」としての学校をつくっていくことは、今後ますます重要になっていくと考えられる。ところで、山岡(2002)によれば、この居場所という言葉がある種の響きをもって使用されるようになったのは、1980年代後半からであるという。もともとは学校にいけない子ども達にとっての「学校以外の行き場」として居場所が用いられていたが、しだいに心理的な面からも居場所が語られるようになったといわれている。居場所とは「空間・時間・関わりに通ずる概念である(田中,2001)」といわれているように、様々なとらえ方や定義がある。玄田(1991)によれば、居場所は単なる空間的場所だけを意味するのではなく、「子どもたちそれぞれが自分自身になりきって活動できるような場所を見つけ、そこで自分なりの活動・遊びをみつけて、新しい生活に適應していくようになる。この子ども自身が選んだ場所や、そこで子ども自身が愛着をもって取り組む遊びを『子どもの居場所』と命名している。文部省(現:文部科学省,1992)は、心の居場所を「自己の存在感を実感でき精神的に安心していることのできる場所」としている。また、北山(1993)は、「『本当の自分』が『ある』ためにはその起源において、それは環境から『自らの分』として居場所を与えられて『いること』が保証されていた部分から出発をする」と述べており、「自分が自分であるための環境、それを『居場所』と呼びたい」と述べている。白井(1998)は、「居場所は、何よりもホッと安心できる場であり、ありのままの自分の価値が大事にされる場所である」と定義している。さらに、竹森(1999)によれば、「居場所はそれとして準備したり、完成されるものではなく、人と人の関係の中で、あるいはたゆみない相互の試みによって、そのまま生かされる『ありよう』を示している」という。「人のありのままが、ありのままで認められる場として、居場所はある」と述べている。

このように、「居場所」は、物理的空間だけを指すのではなく、自分と他者の存在との関係が重要になってくる空間も含まれると考えられる。そこで本研究では、居場所を物理的空間だけではなく、心理的機能的空間を指すものとし、「自己の存在感を実感でき、精神的に安心していることができ、ありのままの自分を受け入れてくれ、かけがえのない自分の価値を大事にしてくれる場所」と定義する。

今までの居場所に関する研究としては、専門学校生や大学生による連想語の調査から居場所イメージについて検討した研究(中村,1998,1999)、大学のキャンパスにおける居場所についての研究(都築,1998)、大学生の居場所と個人の感情、性格についての研究(小畑・伊藤,2001)、青年期における居場所とアイデンティティとの関係についての研究(小沢,1998,2000)などがみられる。しかしこれらの研究は、青年期における居場所についての研究である。小学校、中学校における児童・生徒についての居場所の研究はあまりなされていない。小学校・中学校

は高校に比べて、選択授業が少なく、児童・生徒が教室で過ごすことが多いといえる。また専門学校、大学はアルバイトやサークル活動など学校以外の場所で過ごす時間も多し。小学校・中学校は、学校で過ごす時間が高校生や大学生などに比べて多く、学校の存在が児童・生徒に与える影響は大きいといえるだろう。小学校、中学校における学校の中の居場所について検討する必要性は高いといえる。

小学校、中学校などの学校場面における居場所についての研究としては、小学校高学年の児童を対象とした大寺他（2000）の研究があげられる。教室、図書室、保健室などの23の学校空間における居心地の良さを「ホッとすると感じる」かどうか5段階で評定させている。因子分析を行ったところ、「交友できる空間」、「安心して一人になれる空間」、「癒し空間」、「緊張空間」、「没頭空間」、「かかわりの少ない空間」、「開放空間」の7因子を見いだしている。また、豊田・宮崎・大寺・小澤・芳賀（2000）によれば、教室に居心地の良さを感じている児童は、自分の教室内での行動も積極的、活動的だととらえているという結果を得ている。また、宮崎・大寺・小澤・豊田・芳賀（2000）は、教室を居心地が良いと感じている児童は、自分について肯定的な認知をしていることを示唆している。このように小学校における居場所の研究がなされているが、これらの研究では居場所の条件としてホッとすると感じるかという点で5段階評定させている。居場所の条件というのは、ホッとするだけではなく、別の理由もあるのではないだろうか。居場所の良さとしては、単にホッとするという理由以外にも様々に幅広くとらえる必要があると考えられる。

居場所の条件をホッとするだけではなく、幅広くとらえた研究としては、白井（1998）の研究があげられる。居場所についての面接調査をもとに居場所の条件を測定する質問項目55項目を作成している。さらに山岡（2002）は、白井（1998）の研究をベースに大学生の居場所条件尺度を作成しており、6因子を抽出している。また大久保・青柳（2000）は、大学生を対象に「居場所がある」、「居場所がない」と感じる場所について自由記述による回答を求めている。その自由記述をもとに、「居場所がある」と想定させたポジティブ尺度、「居場所がない」と想定させたネガティブ尺度の2種類を作成している。このように、青年期の居場所に関する尺度作成の試みはあるものの、小学校、中学校における居場所条件尺度については、十分に検討されていない。ホッとする以外にも居場所の条件はあると考えられ、居場所の条件について様々な観点から検討する必要があるだろう。小学校、中学校において、居場所となりうるには、何が必要か、どのような要素が求められるのかを調べる必要がある。

そこで、本研究では、学校の存在が児童・生徒に大きく影響すると考えられる小学校・中学校における子どもの居場所となる条件を検討することを目的とする。また大寺他（2000）においては、物理的な居場所を対象として研究している。前述したように、居場所は物理的な場所だけではなく、自分と他者との関係など、物理的な場所以外にも心の居場所となりうると考えられる。そこで、まず予備調査において、物理的な場所以外にも含めて、小学校、中学校における居場所はどのようなものがみられるか、また居場所の理由、条件にはどのようなものがあるかを検討する。そして本調査において、様々な居場所における居場所の条件を検討し、よりよい居場所を増やす上で、どのような条件が重要であるかを検討する。

予備調査

目的

小学校、中学校それぞれの学校場面において、「居場所がある」と感じていた状況及び理由にはどのようなものがあるかを分類し、明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者 A大学の大学生116名(男性47名, 女性69名)であり, 平均年齢は21.04歳(SD=1.07)であった。

調査時期 2003年11月に行われた。

調査材料 小学校, 中学校それぞれにおいて, 「『居場所がある, 居心地がよい』と感じていた場面」となぜそう感じていたか, その理由について, 具体的に書き出すという自由記述形式とした。

調査手続き

調査は, 講義時間中の一部で実施した。回答は自由記述方式, 無記名で, 対象者ペースで各個人の自由に任せた。また研究中に知りえた個人情報やデータの利用は調査目的以外に使用することはないことを明示し, 同意を得た上で実施した。

結果

小学校場面における居場所 自由記述の結果の整理を行ったところ, 小学校において, 「居場所」場面としては, 159件の反応項目が得られ, 平均反応数は1.4件であった。自由記述の内容を, 心理学系大学教員1名と心理学専攻の大学生, 大学院生5名により, KJ法を用いて各項目を短冊化し, 場面ごとにグルーピング化し, カテゴリー化を行った。その結果, 小学校における居場所については, 「教室」, 「体育館・校庭」, 「図書室」, 「課外活動・クラブ活動」, 「保健室」, 「音楽室・理科室」, 「友だちと遊んでいるとき」, 「先生」の8カテゴリーに分類された。先行研究の結果とほぼ同様であり, この8場面を本調査で用いることとする。

小学校場面における居場所の理由 居場所の理由としては, 179件の反応項目が得られ, 平均反応数は, 1.5件であった。居場所と同様にカテゴリー化を行ったところ, 「友だちの存在」, 「先生の存在」, 「楽しさ」, 「好きなことができる」, 「図書室」, 「達成感・充実感」, 「集団の一員」, 「あたたかさ」, 「一人になれる」, 「その他」の10カテゴリーに分類された。

中学校場面における居場所 自由記述の結果を整理したところ, 「居場所」場面としては, 「部活」, 「教室」, 「保健室」, 「図書室」, 「トイレ」, 「友だちといるとき」, 「職員室」, 「生徒会室」の8カテゴリーに分類された。本調査ではこの8場面を用いることとする。

中学校場面における居場所の理由 居場所の理由として, 184件の自由記述が得られ, 平均反応数は, 1.6であった。同様にカテゴリー化を行ったところ, 「友だちの存在」, 「人がいると感じる」, 「部活動」, 「自由」, 「安らぎ」, 「達成感・充実感」, 「先生の存在」, 「楽しさ」, 「あたたかさ」, 「所有感」, 「図書室」, 「その他」の12カテゴリーに分類された。

居場所条件の設定 居場所であると感じる理由については, 山岡(2002)が作成した大学生用の居場所条件尺度を心理学系大学教員1名と心理学を専攻とする大学生, 大学院生5名により小学校, 中学校の居場所に当てはまるように検討した。さらに予備調査の結果も併せて検討し, 小学校場面においては8項目を, 中学校場面には9項目を追加し, 小学校場面における居場所

Table 1 小学校における居場所条件尺度

-
1. 気を使わなくてよい
 2. 同じ目標を持つ人がいる
 3. 何でも本音で話し合う
 4. あたかさをを感じる
 5. 何も批判がましいことを言われない
 6. ここが居場所だと言い聞かせている
 7. 一人でいても気にならない
 8. お互いに影響を与えあえる
 9. 話しをきいてくれる
 10. そこにいると不安が取り除かれる
 11. 委員会活動や係活動など自分に役割がある
 12. 他に居場所がない
 13. 人と関わらなくてもよい
 14. のんびりした時を過ごせる
 15. 自分を必要としてくれる
 16. なんとなく一人で、そこにいる
 17. スポーツや音楽などやりたいことや得意なことができる
 18. 自分を理解してくれる
 19. いつも気にかけてくれる
 20. 自分のペースで過ごせる
 21. 唯一の居場所である
 22. 自分らしくいられる
 23. 周りに誰もいないと落ち着く
 24. ありのままの自分が認められる
 25. 一緒になって打ち込める事がある
 26. 楽しく遊べる
 27. 規則がない
 28. 仲の良い友だちがいる

注：太字は予備調査の結果追加した項目である。

条件尺度として、Table 1に示すように計28項目を、中学校場面における居場所条件尺度としては、Table 2に示すように計29項目を用いることとする。

本 調 査

目 的

小学校・中学校において、「居場所がある」と感じる状況にはどのような条件があり、どのような共通した条件、異なる条件があるのか、明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者 A大学の大学生・大学院生185名（男性74名、女性111名）であり、平均年齢は20.9歳（SD=3.24）であった。

Table 2 中学校における居場所条件尺度

-
1. 気を使わなくてよい
 2. 同じ目標を持つ人がいる
 3. 何でも本音で話し合う
 4. **楽しく遊べる**
 5. 何も批判がましいことを言われない
 6. ここが居場所だと言い聞かせている
 7. **夢中になれるものがある**
 8. お互いに影響を与えあえる
 9. 規則がない
 10. そこにいると不安が取り除かれる
 11. **自分の活躍できる場がある**
 12. 他に居場所がない
 13. 人と関わらなくてもよい
 14. **のんびりした時を過ごせる**
 15. 自分を必要としてくれる
 16. **なんとなく一人で、そこにいる**
 17. 自分を理解してくれる
 18. いつも気にかけてくれる
 19. 一人でいても気にならない
 20. 唯一の居場所である
 21. 自分らしくいられる
 22. 周りに誰もいないと落ち着く
 23. ありのままの自分が認められる
 24. **あたたかさを感じる**
 25. 一緒になって打ち込める事がある
 26. 話を聞いてくれる
 27. 仲の良い友だちがいる
 28. 一人じゃないと感ずることができる
 29. 自分のペースで過ごせる

注：太字は予備調査の結果追加した項目である。

調査時期 2003年11月-12月に行われた。

調査材料 居場所条件についての質問 小学校、中学校において、予備調査の結果をふまえて検討された居場所条件尺度それぞれ28項目、29項目を5件法にて評定を求めた。予備調査の結果得られた、8場面それぞれにおいて評定を求めた。

調査手続き

調査は、講義時間中の一部で実施した。居場所条件については5件法で評定を求めた。回答は対象者ペースで各個人の自由に任せた。また研究中に知りえた個人情報やデータの利用は調査目的以外に使用することはないことを明示し、同意を得た上で実施した。

結果

小学校における居場所の条件 小学校における8場面それぞれにおいて、主因子法、バリマッ

クス回転による因子分析を行った。2因子以上にわたり、高い負荷量を示した項目を削除し、再度因子分析を行った。信頼性の指標としてCronbachの α 係数を用い、各因子の内的整合性を検討したところ、.653～.932であった。各因子の α 係数は高い数値であり、各因子は一貫性の高い項目によって構成されているといえる。8場面それぞれを因子分析した結果、2因子から4因子の因子構造が見いだされた。8場面の居場所における各因子の負荷量が高い項目の得点を合計し、それを尺度得点として、相関を求めた。心理学系大学教員1名と心理学を専攻とする大学生、大学院生8名により、因子間で相関の高い因子を検討し、その結果、以下のそれぞれの場面において、若干項目は異なっているものの、相関が高い因子は同じ因子名を命名することとした。

(1)教室 教室においては2因子の因子構造が見いだされた。累積寄与率は46.72%であった。第1因子は自分の存在を必要としてくれたり、理解してくれたりと存在価値を実感できる項目が多いため、「存在価値の実感」因子と命名した。第2因子は、居場所を意識して求めているものであり、「しがみつき」因子と命名した。

(2)体育館・校庭 3因子の因子構造が見いだされ、累積寄与率は57.36%であった。第1因子は、自分を認めてもらえたり気楽な時間を過ごすことができる項目がみられることから、「自己の表出」因子と命名した。第2因子は受容されている感覚を持つことができる項目がみられることから、「受容の感覚」因子と命名した。第3因子は居場所を意識して求めているものであり「しがみつき」因子と命名した。

(3)図書室 図書室では、3因子の因子構造が見いだされた。累積寄与率は52.42%であった。第1因子は同じ空間に他者とともにおいたり、同じ時間を過ごすことのできる他者の存在がある項目がみられたため、「他者の存在」因子と名付けた。第2因子は、居場所を意識してもとめているものであり、「しがみつき」因子と命名した。第3因子は他者から物事を強制されることがなくマイペースに時間を過ごすことができるものであるとし、「マイペース」因子と命名した。

(4)課外活動・クラブ活動 2因子を適当と判断し、累積寄与率は46.52%であった。第1因子は他者から安心感やあたたかさを受け取ることができる項目がみられ、「あたたかさ」因子と命名した。第2因子は居場所を意識して求めているものであり「しがみつき」因子と命名した。

(5)保健室 因子分析を行ったところ、4因子がみられ、累積寄与率は60.16%であった。第1因子は、他者から強制されることがなく、マイペースに時間を過ごせる項目がみられ「マイペース」因子と名付けた。第2因子は同じ空間に他者といたり、同じ空間を過ごすことのできる他者の存在があるという項目がみられたため、「他者の存在」因子と命名した。第3因子は居場所を意識して求めている項目がみられたため、「しがみつき」因子と命名した。第4因子は気兼ねなく過ごすことができる項目がみられたことから、「気楽な感覚」因子と命名した。

(6)音楽室・理科室 因子分析を行ったところ、3因子がみられた。累積寄与率は62.96%であった。第1因子は他者と同じ目標を持っていたり、同じことをする項目がみられたことから、「目的・対象の共有」因子と名付けた。第2因子は居場所を意識して求めている項目がみられたため、「しがみつき」因子と命名した。第3因子は、自分には役割があったり必要とされている感覚を持つことができる項目がみられたため、「存在価値の実感」と命名した。

(7)友達と遊んでいるとき 3因子構造が適当と判断し、累積寄与率は45.14%であった。第1因子は、自分を認めてもらえたり、気楽な時間を過ごすことができる項目がみられたため、「自己の表出」因子と命名した。第2因子は、居場所を意識して求めている項目であるため「しが

みつき」因子と命名した。第3因子は、他者や規則に干渉されることがない項目がみられ、「自由の感覚」因子と名付けた。

(8)先生 先生において、因子分析を行ったところ、3因子がみられ、累積寄与率は55.72%であった。第1因子は、自分を認めてもらえたり、気楽な時間を過ごすことができるという項目がみられたため、「自己の表出」因子と命名した。第2因子は、自分の存在を必要としてくれたり、理解してくれたり存在価値を実感できる項目がみられたため、「存在価値の実感」因子と名付けた。第3因子は、居場所を意識して求めている項目であることから、「しがみつき」因子と命名した。

Table 3 小学校「教室」における居場所条件尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量		共通性
	I	II	
I 存在価値の実感 ($\alpha = .927$)			
18. 自分を理解してくれる	.832	.105	.704
19. いつも気にかけてくれる	.826	.119	.697
15. 自分を必要としてくれる	.766	.278	.664
4. あたたかさを感じる	.745	-.025	.555
1. 気をつかわなくてよい	.726	.012	.527
26. 楽しく遊べる	.711	-.114	.518
10. そこにいると不安が取り除かれる	.664	.361	.572
24. ありのままの自分が認められる	.654	.173	.457
8. おたがいに影響を与えあえる	.645	.164	.443
3. 何でも本音で話し合う	.636	.132	.422
28. 仲の良い友達がいる	.623	-.332	.499
2. 同じ目標を持つ人がある	.617	-.027	.381
25. 一緒になって打ち込める事がある	.603	-.002	.363
5. 何も批判がましいことを言われない	.590	.088	.356
17. スポーツや音楽などやりたいことや得意なことができる	.546	.046	.300
14. のんびりした時を過ごせる	.511	.315	.360
11. 委員会活動や係活動など自分に役割がある	.451	-.007	.209
II しがみつき ($\alpha = .806$)			
21. 唯一の居場所である	.216	.790	.670
12. 他に居場所がない	-.090	.788	.630
16. なんとなく1人で、そこにいる	-.079	.761	.585
23. 周りにだれもいないと落ち着く	-.015	.582	.338
13. 人と関わらなくてもよい	.178	.572	.359
6. ここが居場所だと言いつけさせている	.057	.364	.136
固有値	7.58	3.17	
因子寄与率 (%)	32.94	13.78	
累積寄与率 (%)	32.94	46.72	

Table 4 小学校「課外活動・クラブ活動」における居場所条件尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量		共通性
	I	II	
I あたたかさ ($\alpha = .892$)			
4. あたたかさを感じる	.831	.201	.731
3. 何でも本音で話し合う	.778	.149	.627
10. そこにいると不安が取り除かれる	.764	.143	.605
9. 話を聞いてくれる	.745	.148	.577
22. 自分らしくいられる	.744	.169	.582
2. 同じ目標を持つ人がいる	.723	-.119	.537
17. スポーツや音楽などやりたいことや得意なことができる	.690	-.153	.500
1. 気をつかわなくてよい	.626	.169	.420
15. 自分を必要としてくれる	.573	.249	.390
11. 委員会活動や係活動など自分に役割がある	.315	.052	.102
II しがみつき ($\alpha = .806$)			
12. 他に居場所がない	.066	.705	.502
13. 人と関わらなくてもよい	.014	.694	.481
23. 周りにだれもいないと落ち着く	-.089	.648	.428
16. なんとなく1人で、そこにいる	-.063	.643	.417
21. 唯一の居場所である	.228	.635	.456
6. ここが居場所だと言いつ聞かせている	.249	.576	.394
7. 1人でいても気にならない	.331	.484	.344
27. 規則がない	.268	.456	.280
固有値	5.12	3.26	
因子寄与率 (%)	28.44	18.08	
累積寄与率 (%)	28.44	46.52	

小学校における居場所条件の因子分析結果について、主な結果を Table 3-5に示す。

中学校における居場所の条件 中学校における8場面それぞれにおいて、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。2因子以上にわたり、高い負荷量を示した項目を削除し、再度因子分析を行った。信頼性の指標としてCronbachの α 係数を用い、各因子の内的整合性を検討したところ、.530~.970であった。やや低い α 係数もみられるが、おおむね各因子の α 係数は高い数値であり、各因子は一貫性の高い項目によって構成されているといえる。8場面それぞれを因子分析した結果、2因子から4因子の因子構造が見いだされた。中学校においても、小学校と同様に、8場面の居場所における各因子の負荷量が高い項目の得点を合計し、それを尺度得点として、相関を求めた。心理学系大学教員1名と心理学を専攻とする大学生、大学院生8名により相関の高い因子を検討し、以下のそれぞれの場面において、若干項目は異なっているものの、相関が高い因子は同じ因子名を命名することとした。

Table 5 小学校「友達と遊んでいるとき」における居場所条件尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
I 自己の表出 ($\alpha = .897$)				
20. 自分のペースで過ごせる	.808	.061	.274	.732
22. 自分らしくいられる	.753	-.118	.366	.715
24. ありのままの自分が認められる	.752	.006	.216	.615
14. のんびりした時を過ごせる	.748	-.028	.132	.577
3. 何でも本音で話し合う	.671	-.194	.268	.560
1. 気をつかわなくてよい	.641	-.089	.281	.499
25. 一緒になって打ち込めることがある	.641	-.243	.047	.472
17. スポーツや音楽などやりたいことや得意なことができる	.603	-.030	.094	.373
8. お互いに影響を与えあえる	.558	.038	-.114	.326
2. 同じ目標を持つ人がいる	.512	.063	-.119	.280
II しがみつき ($\alpha = .750$)				
13. 人と関わらなくてもよい	.068	.740	.028	.553
16. なんとなく一人で、そこにいる	-.138	.715	-.030	.551
12. 他に居場所がない	-.192	.575	-.035	.369
23. 周りに誰もいないと落ち着く	.049	.570	-.184	.361
21. 唯一の居場所である	-.037	.547	.041	.302
7. 一人でいても気にならない	.213	.455	.145	.273
6. ここが居場所だと言いつけて聞かしている	-.143	.329	.198	.168
III 自由の感覚 ($\alpha = .653$)				
5. 何も批判がましいことを言われない	.204	.123	.789	.679
27. 規則がない	.085	.077	.562	.329
10. そこにいると不安が取り除かれる	.280	-.213	.436	.314
	固有値	4.81	2.53	1.69
	因子寄与率 (%)	24.05	12.64	8.45
	累積寄与率 (%)	24.05	36.69	45.14

(1)部活 部活において因子分析を行ったところ、3因子がみられた。累積寄与率は59.28%であった。第1因子は自分を理解してくれたり、影響のある他者の存在を感じることができる項目がみられたため、「他者の存在」因子と名付けた。第2因子は居場所を意識して求めている項目がみられたため、「しがみつき」因子と名付けた。第3因子は、他者や規則に干渉されない項目がみられたため、「自由の感覚」因子と命名した。

(2)教室 教室においては、3因子がみられ、累積寄与率は、47.38%であった。第1因子は、自分を理解してくれたり、影響のある他者の存在を感じることができる項目がみられたことから、「他者の存在」因子と名付けた。第2因子は、居場所を意識して求めている項目がみられた

ので、「しがみつき」因子と名付けた。第3因子は、周りから独立している感覚を持っている項目がみられたため、「独立の感覚」因子と命名した。

(3)保健室 保健室においては、3因子がみられ、累積寄与率は60.59%であった。第1因子は自分と他者が同じ目標や方向を向いている項目がみられたので、「目標・対象の共有」と命名した。第2因子は、安心して気を使わずに過ごすことができる項目がみられたので、「気楽な感覚」因子と命名した。第3因子は他者と自分を遮断し一人になれる項目がみられたことから「周囲の遮断」因子と命名した。

(4)図書室 図書室において因子分析を行ったところ、3因子がみられた。累積寄与率は、47.76%であった。第1因子は、安心して気を使わずに過ごすことができるなどの項目がみられたので、「気楽な感覚」因子と名付けた。第2因子は自分と他者が同じ目標や方向を向いている項目がみられ、「目標・対象の共有」因子と命名した。第3因子は居場所を意識して求めている項目がみられたので、「しがみつき」因子と命名した。

(5)トイレ トイレにおいては3因子がみられた。累積寄与率は50.15%であった。第1因子は安心して気を使わずに過ごすことができる項目がみられたので「気楽な感覚」因子と命名した。第2因子は、自分と他者が同じ目標や方向を向いている項目がみられたので、「目標・対象共有」因子と命名した。第3因子は居場所を意識して求めている項目がみられたので、「しがみつき」因子と命名した。

(6)友だちといるとき 因子分析を行ったところ、2因子が見られ、累積寄与率は46.41%であった。第1因子は、自分を理解してくれたり、何かを一緒にすることができる他者の存在を感じる項目がみられたため、「他者の存在」因子と名付けた。第2因子は居場所を意識して求めている項目がみられたため、「しがみつき」因子と名付けた。

(7)職員室 職員室においては、3因子がみられ、累積寄与率は58.89%であった。第1因子は、自分を受け入れてもらえているという感覚を実感できる項目がみられたため、「受容の感覚」因子と命名した。第2因子は、職員室にいる先生などへの信頼を感じる項目がみられたため、「大人との信頼感」因子と命名した。第3因子は居場所を意識して求めている項目がみられたため、「しがみつき」因子と命名した。

(8)生徒会室 生徒会室において、因子分析を行ったところ、2因子がみられた。累積寄与率は71.32%であった。第1因子は自分を受け入れてもらえているという感覚を実感できる項目がみられたため、「受容の感覚」因子と命名した。第2因子は居場所を意識して求めている項目がみられたため「しがみつき」因子と命名した。

中学校における居場所条件尺度の因子分析結果について、主な結果を Table 6-8 に示す。

考 察

本研究では、山岡（2002）が作成した居場所条件尺度に予備調査で得られた居場所条件を加えた尺度によって、小学校、中学校それぞれの居場所について、調査を行った。小学校、中学校ともに8場面を用い、その居場所において、どのような居場所の条件があるのか因子分析を行った。

小学校における居場所条件

小学校においては、8場面の居場所について検討を行ったところ、2-4因子がみられた。

Table 6 中学校「友だちといるとき」における居場所条件尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
I 他者の存在 ($\alpha = .947$)				
21. 自分らしくいられる	.828	-.158	.021	.686
24. あたたかさを感じる	.805	-.132	.073	.647
26. 話を聞いてくれる	.798	-.142	-.018	.590
10. そこにいると不安が取り除かれる	.785	-.121	.040	.667
17. 自分を理解してくれる	.781	-.050	.310	.655
23. ありのままの自分が認められる	.768	.209	-.020	.480
27. 仲の良い友だちがいる	.747	-.108	-.113	.502
15. 自分を必要としてくれる	.741	-.196	-.024	.484
11. 自分の活躍できる場がある	.717	-.333	-.024	.484
25. 一緒になって打ち込める事がある	.685	.102	.167	.472
2. 同じ目標を持つ人がいる	.681	-.094	.040	.417
28. 1人じゃないと感じることができる	.672	.065	-.068	.408
14. のんびりした時を過ごせる	.668	.086	.039	.429
18. いつも気にかけてくれる	.662	.076	-.035	.356
8. お互いに影響を与えあえる	.652	-.259	-.216	.418
4. 楽しく遊べる	.638	-.157	.377	.412
29. 自分のペースで過ごせる	.629	.134	.279	.367
3. 何でも本音で話し合う	.618	.136	.489	.489
1. 気を使わなくてよい	.616	-.020	.489	.489
7. 夢中になれるものがある	.544	-.045	.489	.489
9. 規則がない	.423	.018	.489	.489
II しがみつき ($\alpha = .739$)				
20. 唯一の居場所である	.216	.772	.110	.620
16. なんとなく一人で、そこにいる	-.159	.690	-.030	.593
12. 他に居場所がない	.032	.690	.276	.457
13. 人と関わらなくてもよい	-.088	.592	.360	.499
6. ここが居場所だと言いつけて聞かせている	.244	.396	-.100	.364
22. 周りに誰もいないと落ち着く	-.073	.322	.489	.489
19. 1人でいても気にならない	-.090	.300	.109	.191
固有値	7.83	2.80	1.33	
因子寄与率 (%)	31.33	11.18	5.32	
累積寄与率 (%)	31.33	42.51	47.83	

小学校では、「存在価値の実感」因子、「しがみつき」因子、「マイペース」因子、「他者の存在」因子、「気楽な感覚」因子、「目的・対象共有」因子、「自己の表出」因子、「自由の感覚」因子、「あたたかさ」因子、「受容の感覚」因子が見いだされた。

Table 7 中学校「トイレ」における居場所条件尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
I 気楽な感覚 ($\alpha = .838$)				
29. 自分のペースで過ごせる	.828	.100	-.049	.697
21. 自分らしくいられる	.821	.063	.199	.717
14. のんびりした時を過ごせる	.740	.161	.167	.602
19. 1人でいても気にならない	.621	.037	.066	.391
10. そこにいると不安が取り除かれる	.608	.334	.301	.572
1. 気を使わなくてよい	.521	.021	.136	.281
9. 規則がない	.441	.213	.065	.245
5. 何も批判がましいことを言われない	.417	.215	.101	.230
22. 周りに誰もいないと落ち着く	.370	.145	.023	.159
13. 人と関わらなくてもよい	.304	-.015	.036	.094
II 目標・対象の共有 ($\alpha = .845$)				
7. 夢中になれるものがある	.178	.755	.234	.656
2. 同じ目標を持つ人がいる	.019	.744	.067	.558
25. 一緒になって打ち込める事がある	.028	.697	.249	.549
26. 話を聞いてくれる	.213	.613	.394	.576
3. 何でも本音で話し合う	.386	.597	.081	.512
III しがみつき ($\alpha = .867$)				
12. 他に居場所がない	.096	.195	.888	.800
20. 唯一の居場所である	.093	.249	.805	.719
17. 自分を理解してくれる	.369	.283	.674	.672
	固有値	3.90	2.79	2.34
	因子寄与率 (%)	21.68	15.48	37.16
	累積寄与率 (%)	21.68	37.16	50.15

8場面すべてに共通してみられた因子は「しがみつき」因子である。「他に居場所がない」、「唯一の居場所である」などの項目が共通してみられている。自分の身の置き所を一生懸命に求め、探し、確保することで居場所を見いだそうとしていると考えられる。山岡(2002)が「居場所を規定する因子の中には『ほかに居場所がないから』という消極的な意味づけの因子もあるのではないか」と述べている。この8場面に共通していた「しがみつき」因子はまさにこの消極的な意味づけの因子にあたるといえる。

いくつかの場面において共通してみられる因子としては、「マイペース」因子、「他者の存在」因子、「自己の表出」因子、「存在価値の実感」因子である。「マイペース」因子は、保健室と図書室の2場面においてみられた。「自分のペースで過ごせる」、「1人でいても気にならない」などの項目がみられる。このことから、他者から物事を強制されることなく、マイペースに時間

Table 8 中学校「友だちといるとき」における居場所条件尺度の因子分析結果

項目内容	因子負荷量		共通性
	I	II	
I 他者の存在 ($\alpha=.947$)			
21. 自分らしくいられる	.828	-.158	.710
24. あたたかさを感じる	.805	-.132	.666
26. 話を聞いてくれる	.798	-.142	.658
10. そこにいると不安が取り除かれる	.785	-.121	.631
17. 自分を理解してくれる	.781	-.050	.612
23. ありのままの自分が認められる	.768	.209	.634
27. 仲の良い友だちがいる	.747	-.108	.570
15. 自分を必要としてくれる	.741	-.196	.587
11. 自分の活躍できる場がある	.717	-.333	.625
25. 一緒になって打ち込める事がある	.685	.102	.480
2. 同じ目標を持つ人がいる	.681	-.094	.473
28. 1人じゃないと感ずることができる	.672	.065	.456
14. のんびりした時を過ごせる	.668	.086	.454
18. いつも気にかけてくれる	.662	.076	.444
8. お互いに影響を与えあえる	.652	-.259	.492
4. 楽しく遊べる	.638	-.157	.431
29. 自分のペースで過ごせる	.629	.134	.413
3. 何でも本音で話し合う	.618	.136	.400
1. 気を使わなくてよい	.616	-.020	.379
7. 夢中になれるものがある	.544	-.045	.298
9. 規則がない	.423	.018	.179
II しがみつき ($\alpha=.739$)			
20. 唯一の居場所である	.216	.772	.643
16. なんとなく一人で、そこにいる	-.159	.690	.502
12. 他に居場所がない	.032	.690	.477
13. 人と関わらなくてもよい	-.088	.592	.358
6. ここが居場所だと言い聞かせている	.244	.396	.214
22. 周りに誰もいないと落ち着く	-.073	.322	.109
19. 1人でいても気にならない	-.090	.300	.098
固有値	10.29	2.70	
因子寄与率 (%)	36.76	9.65	
累積寄与率 (%)	36.76	46.41	

を過ごすことができることが居場所であると感じる要素の一つだといえるだろう。「保健室」, 「図書室」は、集団で過ごすというよりも自分のペースで、安心して、落ち着いて行動できる場であると考えられ、マイペースに過ごせることも居場所の大事な条件だと考えられる。

次に「他者の存在」因子であるが、これも「保健室」と「図書室」においてみられた。「楽しく遊べる」、「自分を必要としてくれる」、「仲の良い友だちがいる」などの項目がみられた。保健室の先生であったり、仲の良い友だちであったり、安心して共に過ごすことのできる他者が周囲に居るといことは、居場所の重要な条件だと考えられる。

「自己の表出」因子は、「友だちと遊んでいるとき」、「先生」、「体育館・校庭」の3場面においてみられた。「自分らしくいられる」、「ありのままの自分が認められる」などの項目がみられている。ありのままの自分を表出して、その自分を他者から認めてもらうことができ、気楽な時を過ごすことができるという内容である。竹森（1999）が「自分自身のありのままが生かされる場」と述べているように、無理せず、自然の自分を出して自分らしくいられること、自分を表出しても大丈夫であることが、居場所の条件の1つと考えられる。

「存在価値の実感」因子については、「教室」、「先生」、「音楽室・理科室」の3場面においてみられた。「いつも気にかけてくれる」、「自分を必要としてくれる」、「自分を理解してくれる」などの項目がみられた。他者が自分の存在を必要としてくれたり、理解してくれたり存在価値を実感できることが居場所の条件となっているといえるだろう。先生や友だちなどの他者に自分が必要とされていると感じられることが居場所感覚につながっていると考えられる。

中学校における居場所条件

中学校において、8場面の居場所について検討を行ったところ、2-4因子がみられた。中学校では、「しがみつき」因子、「気楽な感覚」因子、「他者の存在」因子、「受容の感覚」因子、「目的・対象共有」因子がいくつかの場面において、共通して見いだされた。

「しがみつき」因子は、「友だちといるとき」、「生徒会室」、「教室」、「部活」、「職員室」、「トイレ」の6場面においてみられた。「唯一の居場所である」、「他に居場所がない」、「なんとなく1人でそこにいる」などの項目がみられている。小学校における因子と同様、どこかに所属していたいという必死な状態なのではないかと考えられる。

「気楽な感覚」因子は、「保健室」、「図書室」、「トイレ」の3場面において共通してみられた。「そこにいと不安がとりのぞかれる」、「気を使わなくてよい」などの項目がみられている。小学校校同様、安心して気を使わず、楽に過ごせるということが居場所の大きな要因となっているといえる。

次に「他者の存在」因子であるが、これは、「教室」、「部活」、「友だちといるとき」の3場面においてみられた。「話を聞いてくれる」、「一緒になって打ち込めることがある」、「自分を理解してくれる」などの項目がみられた。自分を理解してくれ、何かを一緒にすることができる他者の存在というのが、居場所の条件の一つと考えられる。

「受容の感覚」因子については、「職員室」と「生徒会室」の2場面において共通してみられた。「ありのままの自分が認められる」、「あたたかさを感じる」、「自分らしくいられる」などの項目がみられた。ありのままの自分を受け入れ、自分の活動を認めてくれるということも居場所の条件といえるだろう。

「気楽な感覚」因子は、「保健室」、「図書室」、「トイレ」の3場面において共通の因子がみられた。「そこにいと不安がとりのぞかれる」、「気を使わなくてよい」などの項目がみられた。このことから、安心して気を使わず、楽に過ごすことができることが居場所の条件といえるだろう。

また、「目標・対象の共有」因子は、「保健室」と「図書室」の2場面においてみられた。「一

緒になって打ち込めることができる」、「同じ目標をもつ人がいる」、「仲の良い友だちがいる」などの項目がみられた。同じ方向を向いている他者がいるということが居心地の良さにつながるといえる。

小学校と中学校における居場所条件の共通点

小学校・中学校に共通してみられた因子は、「しがみつき」因子、「他者の存在」因子の2つであった。居場所に関する研究の多くが、精神的に安心を得ることができ、自己の価値を実感できるといった肯定的なことをあげている。例えば高柳（2000）の研究では、大学生を対象に小学生・中学生の時を振り返って、発達段階と居場所の関係を検討しており、その結果、「承認、尊敬される」場所と「ハッスルできる」場所は学校であるということが示唆されている。しかし、山岡（2002）が「居場所」を規定する因子の中には消極的な意味づけをする因子もあるのではないかと指摘したように、居場所を必死に求めている子どももいるのではないだろうか。周りから認められたり、自分が活躍できるなどの積極的な居場所を見いだせる場合はもちろん大事なことであるが、それ以前に「一人じゃないのだ」という安心感を必死で求めており、一生懸命所属しようとしがみついている場合も多いのではないだろうか。

次に「他者の存在」因子であるが、自分の話を聞いてくれる他者がいたり、影響を与えあうことのできる他者がいるなど、他者と自分の関係を表した項目が多く見られた。学校における他者とは、同じクラスの友だちであり、部活の友だちであり、先輩、後輩であり、先生である。学校にはたくさんの他者が存在しており、共同生活を送っている。大勢の他者との生活の中で、自分のあり方、行動の仕方を他者に受け入れてもらえているという感覚が重要だといえるだろう。自分を認めてくれる仲間の存在、先生の存在が安心してその場所にいることができ、居心地の良さにつながり、自己肯定にもつながると考えられる。

小学校と中学校における居場所条件の違い

小学校においては、いくつかの場面において5つの共通する因子がみいだされた。これらの因子から、小学校においては、中学校と比較して、自分の発言や行動を表に出すことができ、それを認められる場に居場所を感じているといえるだろう。授業において、学級活動において、行事においてなど様々な場面において、児童の意見や行動を積極的に認め、受け入れていくことが、小学校における居場所づくりには大事だと考えられる。学校においては、競争的側面が減ってきているが、みんながすべて一律に平等ではなく、いろいろな場面において、一人一人が認められることが大切なのではないだろうか。一人一人が認められるためのいろいろな場面を増やしていくことが重要だと考えられる。特別に行事を増やすというよりも、柔軟で多様な観点から、様々な子どものよさを認めることが、さらに必要だと考えられる。

中学校においても5つの因子が共通してみいだされた。これらの因子から、小学校に比べて、中学校は楽な気持ちで過ごすことができ、他者からも受け入れてもらえる場に居場所をみいだしていると言えるだろう。中学生になると、他者から、特に周りの友だちから自分がどう見られているか気にするなど、他者を気にする年代となる。中学校においては、小学校と異なり、自分を出すことができずに気を使って過ごしているのではないだろうか。ありのままの自分が出せないために気楽に自分を受け入れてくれる場所に居場所を見いだしていると考えられる。また、中学校は、小学校に比べると朝学校に行ってから、朝学習、委員会活動、部活動など、

遅い時間まで忙しい時間を過ごしているといえる。学校が終わってからは塾や習い事もあり、あわただしい毎日だといえるだろう。放課後の時間も含め、気楽に友だちとおしゃべりができるなど、楽な気持ちで過ごせる曖昧な時間、自由な空間がもっと大切なのではないだろうか。また、居場所を求めて、必死になっている部分も見られたことから、例えば、一人でそこにいる不自然ではない空間、時間をもっとつくる必要があるといえる。

心の居場所の今後について

小学校においては、自分を発揮でき、認められる場、中学校においては、ホッとできる気楽な場が必要であるといえる。学校の中において、心の居場所はいろいろあるが、その中でも他者の存在、受け入れてもらえるという安心感、どこかに所属していたいという気持ちが根底にあるのではないだろうか。学校において、少しでもどこかに居場所をみつけ、安心して学校生活を送ることによって、子どもの心が生き生きと成長していくと考えられる。

本研究では、大学生を対象に小学生・中学生だった頃のことを想起させ、調査を行った。実際に今、小学生、中学生においては同じ結果がみられるのか、さらに検討する必要があるだろう。また、学校外での生活における居場所についても検討していくことが必要だといえる。

引用文献

- 玄田初榮 1991 子どもの「居場所」とその発達の意味(1) 昭和女子大学女性文化研究所紀要, 8, 63-78.
- 北山 修 1993 自分と居場所 日本語臨床の深層第3巻 岩崎学術出版社
- 宮崎世津代・大寺せい子・小沢 暁・豊田英昭・芳賀明子 2000 小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究IV—学校の居心地と自己認知— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 462.
- 文部省(現:文部科学省) 1992 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して— 学校不適応対策調査研究協力者会議最終報告
- 中村康子 1998 居場所イメージに関する検討—連想語の調査を通して— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 138.
- 中村康子 1999 「居場所がある」と「居場所がない」との比較 —〇△□法の基礎的研究として— 大阪市立大学生活科学部児童・家族相談所紀要, 16, 13-22.
- 中野靖彦 1998 子どもの居場所を求めて 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 1, 185-191.
- 小畑豊美・伊藤義美 2001 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類— 情報文化研究, 14, 59-73.
- 沖田寛子 1997 不登校現象と子どもの「居場所」 山口大学文学会誌, 48, 17-35.
- 大久保智生・青柳 肇 2000 心理的居場所に関する研究(2)—居場所感尺度作成の試み— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 161.
- 大寺せい子・小沢 暁・豊田英昭・宮崎世津代・芳賀明子 2000 小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究II—自分の教室の居心地と教室空間に対するイメージ— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 460.
- 小沢一仁 1998 青年の居場所から見たアイデンティティ 日本青年心理学会第6回大会発表

論文集, 32-33.

- 小沢一仁 2000 居場所グラムによる青年期のアイデンティティの解明の試み 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 27.
- 白井利明 1998 若者・心もよう⑩若者に居場所はあるのか 大学進学研究, 108, 54-50.
- 高柳真人 2000 児童・青年期における発達段階と居場所の関係 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 462.
- 竹森元彦 1999 心の発達における居場所の役割 鳴門教育大学研究紀要, 14, 127-135.
- 田中治彦 2001 関わりの中としての「居場所」の構想 田中治彦(編) 子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わりの中」へ— 学陽書房 p.8.
- 豊田英昭・宮崎世津代・大寺せい子・小沢 暁・芳賀明子 2000 小学校高学年児童の「学校における居場所」の研究III—自分の教室の居心地と学校適応感— 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 461.
- 都築 学 1998 キャンパスにおける大学生の居場所—郊外型のマンモス私大における分析— 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 36-37.
- 山岡俊英 2002 大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究 佛教大学教育学部学会紀要, 1, 137-167.

Study of 'kokoro no ibasyo' in elementary school and junior high school.

Toshie MIYASHITA* and Moyoko ISHIKAWA**

ABSTRACT

"kokoro no ibasyo", student's mental places in schools, have been more needed these days. This study sought to examine the "ibasyo" and its necessary conditions in elementary school and junior high school. A questionnaire based on preliminary investigations was given to 185 of university students (74 males and 111 females; mean age=20.9, SD=3.24).

The results indicated eight places for "ibasyo" in elementary school (for example, a schoolroom, club activities and library), and eight places for "ibasyo" in junior high school (for example, a schoolroom, toilet and teacher's room). Factor analysis revealed that, two to four factors contributed to determine "ibasyo" in elementary school and junior high school. This shows that, as a condition of "ibasyo", it is important for elementary school students to be recognized, and for junior high school students to feel at ease.

* Division of School Psychology and Counseling

** Katano-city Public Asahi Elementary School